

「……ご主人様……?♡
随分と急……ですねっ♡♡」

「……アカネが望んでいたからな
だったらお望み通り
やってあげなきゃだろ? (笑)」

「……はい♡♡」

(流石はご主人様♡♡
そんな素振りをしていなかったのに……
私の心の奥の望みを……
見つけてしまうんですもの♡♡)

ぽんっ!!♡
ぽんっ!!♡

ぽんっ!!♡
ぽんっ!!♡



「嫌なら

やめようか? (笑)」

「…そんなじわる

言わないでください

ご主人様♡♡」

「ご主人様のお世話を

しなきゃいけないはずなのに…♡♡

こんなスケベなアカネのまんこにたぐっぷりと

お仕置きしてください♡♡」

おんっ!!

おんっ!!

おんっ!!



「わかったわかった
それじゃあアカネには
新しい役目を刻みつけて
やるからな」

(新しい役目…?)

「一体なんでしょう?♡♡」

「…っ!♡おっ♡」

「ご主人様…そこっ♡」

「ここが弱いのか
それじゃあ、じっくり
せめてやるからな(笑)」

はっ!!

はっ!!

はっ!!



「ご…ご主人様…♡♡♡」

「ん？」

「そんなに弱点突かれたら…
私…ダメになっちゃう
ますっ♡♡♡」

「そうか…
それなら」

ぽんっ!!

♡ぽんっ!!

♡ぽんっ!!



「もっとダメに
してやるからな(笑)」

「んひいつ♡♡♡」

「ちんこ無しじゃ
耐えられない
俺専用の便女メイドに
してやるからなっ」

「ご主人様…それが…私の
新しい役目…ですね?♡
私をチン堕ちさせる気です♡
…でもご主人様が喜んで
くださるなら…拒めませんね♡♡♡」

「ほら、いぐぞ」





「おおおおお~~~~♡♡♡」

ひゅるるる♡♡

「ご主人様のおつあつザーメン
しつかり注がれてます…っ♡♡♡」

「あゝ射精る
アカネのとろとろまんこに
がつつり射精してる…!」

イク♡

イク♡



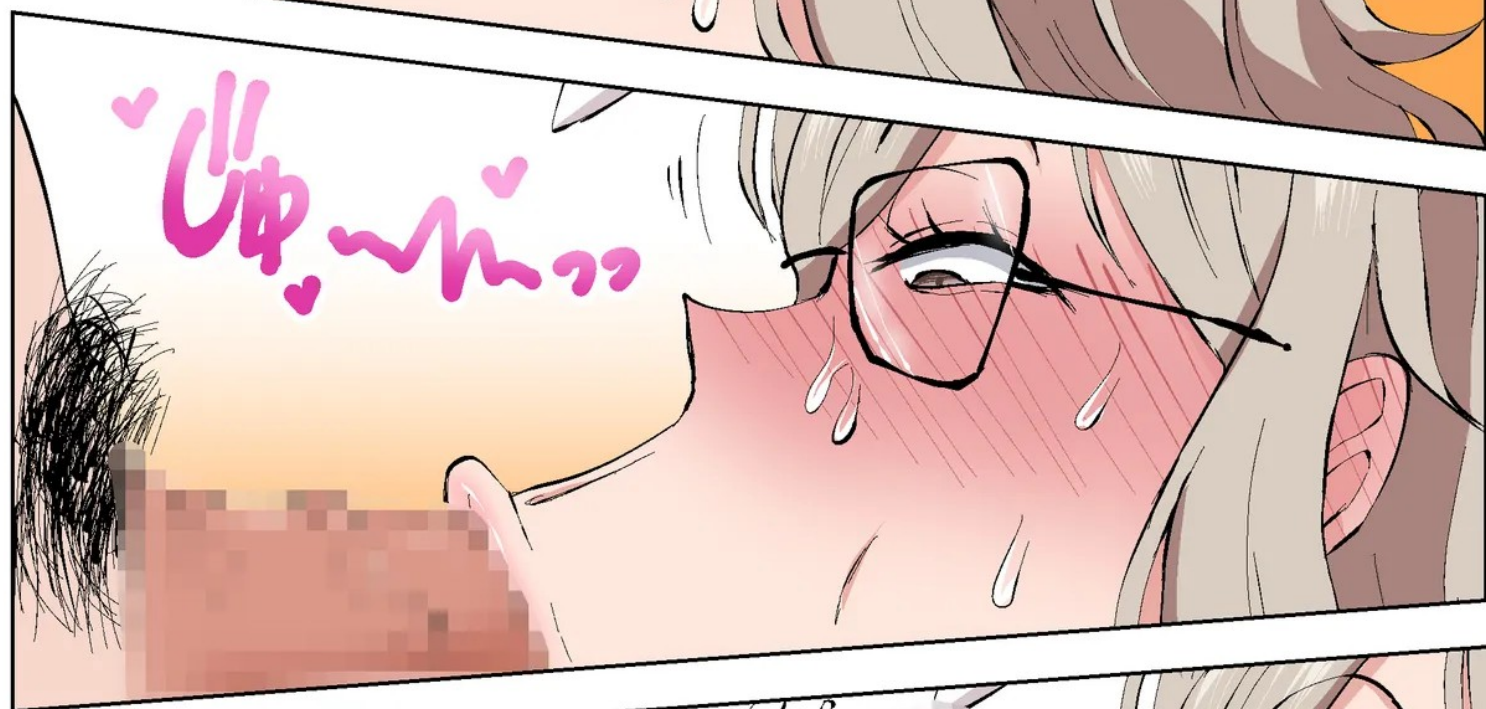
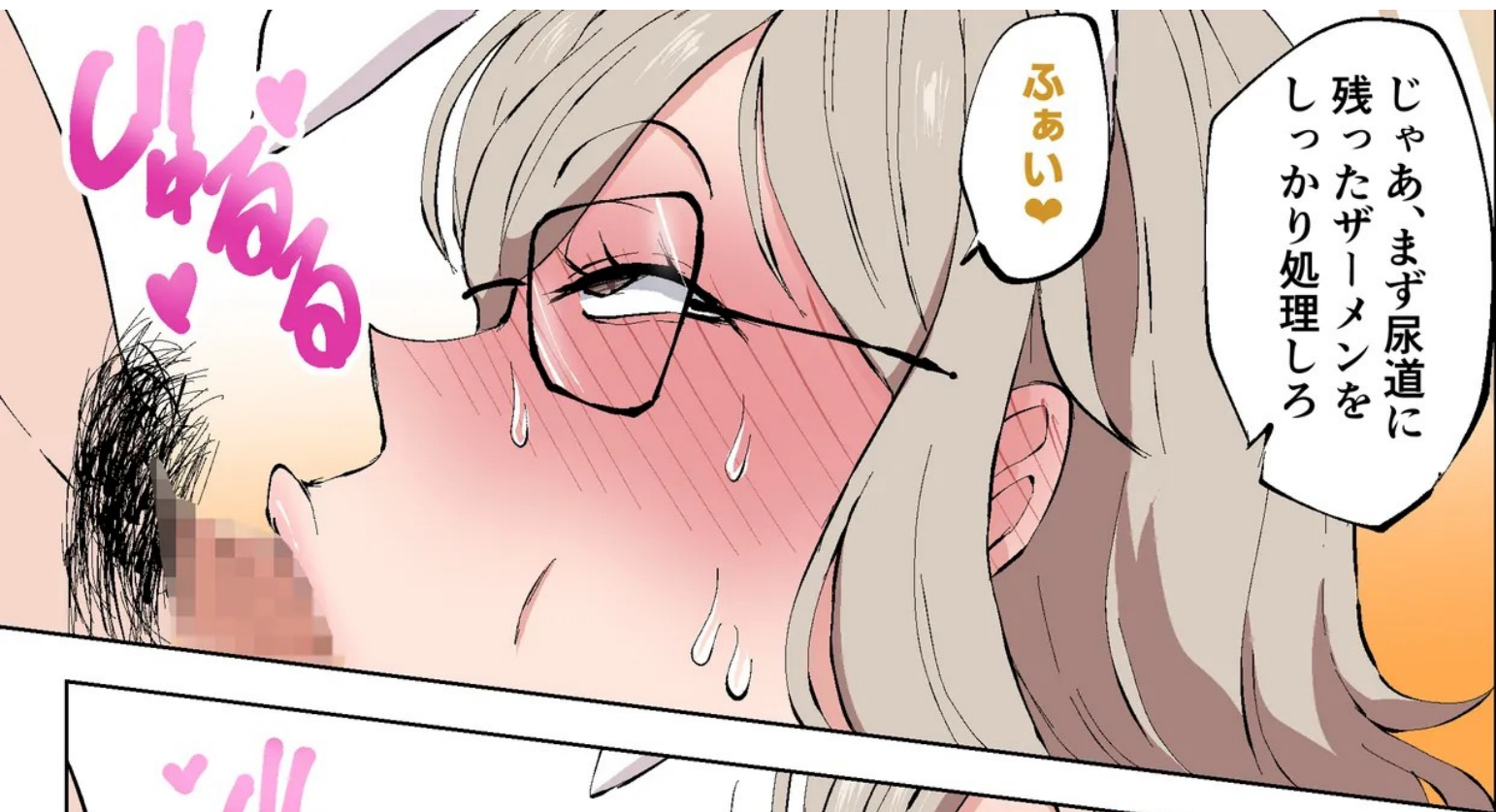
「アカネはこれから
俺の便女メイドだからな？
わかったか？」

「…はい♡♡♡」

「ご主人様専用の便女メイドとして
常にご主人様喜んで
頂けるよう…精進します♡♡♡」
（ご主人様の射精で…
私のまんこ脳に…しつかりと
便女メイドとしての資格を…
焼き付けてもらっちゃいました♡♡♡）

イグ♡







ご使用いただき
ありがとうございます
ます♡♡♡

これからはしっかりと
ご主人様のおちんぽも
お世話いたします♡♡♡

げろろろろ



ご主人様の
残り汁…♡♡

しっかりと処理してこそ
便女メイドです…♡♡

わんわん